

ゆうかり放送委員会提供

ゆうかりに乾杯

第70回放送の概要（2013年9月28日放送）

パーソナリティ

さくら（安本久美子）
タロウ（佃 由晃）
なか（中嶋邦弘）

コアラさんの地域瓦版

アコ（三木文子）
かりん（妹尾優香）



ミキサー

門ちゃん（門田成延）
いっちゃん（一ノ瀬悟）

相談役

わだかん（和田幹司）

会計

小山俊則

（CM）武井咲です。献血ありがとうございますの声が届いています。わかきみーなちゃん 8 才より。献血ありがとうございます、命をわけてくれて。ありがとうございます。生きるという贈り物。日本赤十字社。Love in action.

（CM）頑固な肩こり、腰痛に悩まされている。故障のため趣味のスポーツが出来ない。医者から老化だから仕方がないと言われた。姿勢が悪くなってきたと感じる。こんなことで困っていませんか。あなたが” なりたい” カラダが手に入ります。経験豊富な伊集院接骨院があなたの悩みを解決します。本日は健康な体づくりのプロフェッショナル伊集院接骨院様（電話078-785-4744）の御協力を頂きました。

（CM）今年、創業90周年を迎えたエキストラコーヒーでは、新商品として、この9月、「カフェオレベース」を発売。からだにやさしい、てんさい糖を使ったコーヒーで、簡単にカフェオレを作る事が出来ます。是非、お試しください。本日はエキストラ珈琲様（電話078-671-0135）のご協力を頂きました。

1. オープニング

本日から我々と同じ兵庫高校の卒業で、妹尾優香さん（64 陽会）がゆうかり放送委員会のメンバーになりました。本日の放送は、ゲストはお招きせず、放送委員会のメンバーの和田、中嶋、佃が9月初めに東北を訪問したので、その状況についてお話しします。

2. 東北訪問（1）

昨年9月に、同じメンバーで第1回目の東北訪問をしており、今回は9月2～5日の4日間、岩手県（大槌町、釜石市、陸前高田市）、宮城県（気仙沼市、南三陸町、石巻市）、福島県（福島県庁、南相馬市小高区）の3県を訪問した。昨年から1年経ち、震災からは2年半経った被災地の皆さんの気持ちを伺うのが目的です。

(大槌災害FM, 陸前高田災害FM)

震災で設立された災害FM局は、近く2年間の免許期限切れを迎えています。

大槌災害FMは町役場が全壊し、町長以下多くの職員を亡くし、多数の応援職員で町の業務を行っていることもあり、免許更新手続きが進んでいません。町内の現状を聞くと、雇用状況が厳しく、臨時雇用はいくらでもあるが、安定した仕事がないため、町外に出て行く人が多いことが課題とのことです。最大の問題は震災前から始まっている人口減少であり、産業が活性化しなければ復興はなく、見捨てられた町になるという認識を持っている。

陸前高田災害FMは、免許更新は行政の理解もあり、1年間は問題なく延長できる見込み。現状は2年半経ってガレキは片付いたが、何も変わっていない。陸前高田は震災前より過疎化しており、旦那1人では食べていけない地域で、殆ど共働きしている。仮設の店舗は増えたが、このまま仮設で終わるのか、元に戻れるか不安を抱えている。人口も減り、減った場所で商売が成り立つのかの不安がある。嵩上げは8~10mで工事が遅れているため先を見通せず、生活設計が出来ないという不安に繋がっている。



すみれさん 小松さん (中嶋) 道又さん



伊勢さん 阿部さん 松野さん

(大槌町 小川旅館 小川京子さん)

小川旅館は幕末創業の老舗旅館で、津波で2階まで壊され、その後火災で全壊した。女将はお母さんが入院中の盛岡に行っていたので、直接の被災はしなかった。元の旅館を再建したいが、堤防、嵩上げ工事が見通せないので、仮設の旅館を始めた。

—録音音声—

元の旅館は津波と火災でなくなった。場所は町の中心部で、建物がなくなると海はこんなに近い、月が大きく見えることに気がついた。海に近い地域は逃げなさいと言われていたが、住んでいた地域は中心街で、ここに津波が来るはずはない、津波が来れば大槌町は全滅するので来るわけではない、今までの津波はそれほど大きくなかったので、住民は逃げることは考えていなかった。

防潮堤(14m)は着工が2年延び、29年着工。海は見えなくても高ければ安全と思っている。海の方は景観がなくなるという思いが強い。

音声で流さなかったお話として、2年半経過したが、3.11で止まっている。仮設の旅館をグループ補助で建てた。幕末創業のためどうしても戻りたいが、その場合はグループ補助が使えず、自己負担となる。10年間借地契約の仮設旅館の借金が大きく、2重・3重のローンとなる。今は借金返済のため、旅館の狭い事務室に家族3人が雑魚寝。睡眠2、3時間。借金を抱えているので身を粉にして働かないと食べていけない。生活設計に大きな不安を抱えている。サラリーマンをしていた御主人も会社を辞め、2人で旅館経営をされている。早い時期に仮設旅館を建てたので、お陰さまで復興関係のお客さんに沢山来てもらっていると言っておられた。



小川京子さん 御主人



役場内掲示板



旧大槌町役場



大槌町役場（旧大槌小学校）

（釜石市 @リアスNPOサポートセンター 代表理事 鹿野順一さん）

—録音音声—

あの日と何も変わっていない。復興と言える状況ではない。震災後1年は目の前の事に追われ、2年目からは行政が復興プランを出し初め、復興の意味が細分化される。震災当初は復旧で、1つでよいが、今は生活、産業経済、町の復興の3つに分けられると思う。現状はこのバランスが崩れている。生活は復興が殆ど進んでいない、産業の復興は進み始め、町の復興はこれから。

生活の復興はこの町の以前の状況がどうであったかを考える必要がある。少子高齢化が顕著で（高齢化率34%）、人口流出で若者がいなくなり、そのような状況を考えると、津波という決定的に違うファクターがあるので、元の場所での再建が前提にはならない。土地がないので人工的な建物で上に逃げるしかない。従って復興公営住宅は避難ビルと考え、ある程度高層ビルが必要で、次に津波が来ても助かることになる。従って復興公営住宅が鍵になる。

産業復興は、1次産業は国の保証もあり、保険も適用されるので上屋、工場は出来た。しかし人が集まらない。震災前から抱えていた課題が顕在化し、加速している状況。ネガティブな事を言っているようだが、そうは思っていないで、そういう町だったから、誰に文句を言ってもどうなるものではない。

今、市民力向上を言っており、やってくれからこうしたいに変化させたい。住民から市民になってもらう。文句ばかりいっていても何も進まない。こういう町にしたいと言う声を一人でも増やす。行政に早く決めてくれよと言うのは簡単だが、自分の町だから繋ぎを作って行かないと、そのうち被災地は忘

れられるだけになってしまう。

鹿野さんの話を伺うと復興が期待できる。鹿野さんは復興計画の中で、子供達の位置付けを、保護される立場から、復興は10年、20年の勝負になることを考えると、子供たちこそ主人公という考えで、今から子供も参加すべきと言っておられた。中学生にこの町を出てから、この町に帰って来たいと思うかと問い、そのためにどのような町づくりをしたいかを考えてもらい、市長に提言書を提出している。

釜石市はピーク人口が10万人から震災前で4万何千人、今は3万人台で過疎化しており、過疎地域の指定を受けようとしてまで考えていた。鹿野さんはそのような現状を認識したうえで、どのような町づくりをするかを考えている。大きな眼で物を考え、行政と協力して進めている。東北の被災地はすべて、震災前から過疎化、高齢化が進んでいる地域で、そのため大変な苦勞をされている。



鹿野順一さん



@リアス運営の「みんなの家かだっぺ」

3. ミュージックコーナ: 明日という日が (夏川りみ)

東日本復興応援ソングの1つ。2006年に作られた曲で、仙台市立八軒中学校の吹奏楽・合唱部の部員たちが東日本大震災被災直後、同中学校の校舎で避難生活を送る被災者約100人の前で歌唱した合唱曲。その様子がNHKのニュースで報じられると、明日への希望を綴った感動的な歌詞もあいまって大きな反響を呼んだ曲です。

4. 東北訪問 (2)

(気仙沼市 条南中学校、及び気仙沼商店会 小松恵久夫さん)

条南中学校生徒さんと商店会の小松さんは、1月17日の追悼の日に来神された。4人の中学生と今回再会し、凄くしっかりしていることに驚いた。大震災という運命的な出来事は、人間をしっかりさせ、そして頼もしさを感じた。校内に復興教室を作り、神戸から贈った鯉のぼりが展示され、自分達にも出来ることがあるという、意気込みを感じた。

小松さんには、翌朝海岸沿いの被災地を案内してもらった時、海がこんなに近いとは思わなかった、海に近い所に住んでいた事を認識したという言葉が印象的であった。前夜に条南中学の先生と商店会の人と会食したが、東北弁で話されていたことにほっとした感じを持った。

—録音音声—

(条南中学校)

今年1月、神戸を訪問した印象は、きれいな町並みに復興していた事、しかし街中には震災の跡を忘れないよう工夫がされて残されている。気仙沼も、震災の跡を全てをきちんと片づけるのではなく、モニュメントなどを作ったらと思った。(鈴木雄太さん)

1.17 追悼行事を見て、震災から長年経過しているにも関わらず、大きなイベントを開催し、多くの人が追悼に集まるのは、震災を忘れないと強く思う人が沢山いることを感じたので、自分達も東日本大震災を忘れないために、大きなイベントを持続したり、一人一人が震災を忘れない気持ちを強く持つことが大切と感じた。(伊藤早希さん)

全体的には沿岸部は何も変わっていないとよく言われ、そのような地域に中学生が関与することは出来ないと思い、まず自分達が出来ることが探し、中学生代表者会議で話した事だが、自分達の学区でもよいし、地域の人達とコミュニケーションをとり、直接的な建物の復興には関われないが、地域の人との交流を通して復興に繋げていきたい。(生徒会長)

(気仙沼商店会 小松恵久夫さん)

普段の生活では海が見えないので、海がこんなに近いと思わなかった。海は500m、1km先と思っていた。震災後皆が改めて自分達は海と一緒に暮らしていたことに気付き、再認識した。

日々やりたいことは沢山あるがなかなかできないことが多い。自分は今の生活をする中で精いっぱい。自分ができることは、今やっている仕事が今できることで、それを追求していくことが復興なのかと思い、自分が復興する事が周りの復興にも役立つのではと仲間に話し、信じて頑張りましょうと言っている。コンビニの商売(ローソンを2軒)は経営的には大丈夫だが、将来は不安。多くの企業が出店してきているので、過剰店舗になると考えている。



条南中学校 復興教室



集まって頂いた生徒さん



(中嶋) 小松恵久夫さん (和田)



津波で倒壊した墓石

(南三陸町 上山八幡宮禰宜 工藤真弓さん)

工藤真弓さんは、南三陸町上山八幡宮の禰宜さんで、震災当日は小高い海拔10数mの位置にある神社から、津波が押し寄せ、町が呑みこまれていく様子を見ていた。神社の鳥居の足元まで津波が押し寄せ、「波来の地」という石碑が建てられている。神社の前方には、鉄骨だけがむき出しの状態になった

南三陸町防災対策庁舎が見える。自宅は津波の溜まり場になり、流されなかったが全壊し、今は仮設暮らしをされている。震災後はまちづくりに積極的に参画し、住民の思いを復興計画に反映させるため、さまざまな活動をされている。

—録音音声—

取り組みの対象はおばあちゃん、子供など復興事業には参画出来ず、復旧、復興により環境が改善されるのを待っている人を対象にし、自分達で出来る復興は何かを考えた。一つは、「南三陸椿ものがたり復興」。なんで椿かと言うと、南三陸町には、椿が自生している島が志津川にあり、塩害で立ち枯れたスギが奥の方まで以前はあり、そこに咲いていた椿は震災後も咲いた。住民から塩などに強い椿を植えたいと言ってきた。昔は油をとって笛にしたり、身近に椿の文化があった。昔に立ち返り、お母さん方に思い出を語ってもらうと、堰を切ったように皆が話始め、椿でネックレスを作ったといった話をしてくれた。原風景のようなお母さんの想いを聞き、椿で何が出来るかを考えた。避難路に椿を植える事にし、この土地に初めての人も逃げられるようになり、町全体の観光マップに書くことを考えている。この取り組みは地についた活動になると考え、子供は種をひらい、仮設の住人は苗木を作り、2年で芽が出るので待つ時間が楽しみに変わる。椿を真中に置いたまちづくりは素敵と思った。

待っているのではなく、住民がみずから考える力を蓄えないと、今後も竜巻などの自然災害もあり、復興した後が大変である。2年半も経ったので被災者ではない、被災地ではないという意識を持って復興していきたい。

何も変わらないのは当たり前でゆっくりとしか変わらない。それは受け入れているし、急いで変わった時は奥尻のように5年でスピード復興したが20年後はどうかということもあるので、一番近い所と一番遠いところを見たいので、遅いかと言うとゆっくり考えているし、種も撒いているのでゆっくり進んでいると信じて。そこに文句はない。その時間の中でどれくらいコミュニティを構築できて学べるか、住民が主体となってやるんだという土台を作れるかという課題があるし、それを協働で行政と一緒にやっていくのが理想。住民だけでは絶対出来ないので、行政、他の支援者と皆でやっていくのが理想です。

「南三陸椿ものがたり復興」の他に、工藤さんが取り組んでおられるのは、「かもめの虹色会議」です。行政のまちづくり会議は開催頻度が少なく、住民の声が反映しにくいので、虹色会議を月2回開催し、若い人、関心ある人に集ってもらい、喫緊の課題である防潮堤や町づくりについて、住民の意見をどのように反映していくかを議論し、提案している。要望したのは、過去の津波の歴史から堤防の位置のセットバックを提案している。提案に際しては行政が納得できる提案を心掛けている。工藤さんは非常に素晴らしいリーダーであると思いました。



工藤真弓さん



ここまで津波が到達「波来の地」



神社の前方に南三陸町防災対策庁舎が見える



工藤さんの描かれた「つなみのえほん」

(南相馬市小高区 塚原行政区長 今野由喜さん)

今野さんには長田にも来てもらっている。自宅は津波で流され、自身も津波で流されたが九死に一生を得、さらに原発の放射能でひどい目にあっておられる方です。昨年小高区を案内してもらった時は、水生植物のガマの穂が生えていたが、今回は野っばらで乾燥しており、2年半経って状況が変わってきた事を感じた。今野さんは4ヶ所の仮設の集会所で癒しのサロンを運営している(NPO法人つながっぺ南相馬)。サロンの運営も昨年に比べると落ち着き、しっかり度合いの高い方がお手伝いされていた。仮設は神戸の場合に比べ、木を使ったりして改善されている。これから家を建てたり、仕事で出て行くようになると大変になると思われた。

集会所ではおかんアート、おとんアートと呼んでいる、手作りした小物が展示され、10月31日～11月5日にデュオ神戸で開催予定のアート展で、南相馬の作品を展示する予定である。今回も今野さんには現地を案内いただき、長いおつきあいになりそうな感じを受けた。

—録音音声—

今野さんの若夫婦一家は鹿島区に避難、今後家族が同じ屋根の下に戻ることは出来ない。若夫婦は子供が学校に慣れ、今住んでいる地区に家を建てる予定。今野さん自身はぎりぎりまで帰ることを模索する。親と子供が別々に家を建てると、災害公営住宅の融資は1家族のみ(原状復帰のための融資)、放射能が理由であることを認めてもらいたい。何かをやるうとして初めて壁に気がつくこと、震災直後はわからなかった事が沢山出てくる。

被災地の今の一番の問題はモチベーション。いつ帰れるかわからない、家族が分断するのではないかななどのストレスがあり、長期化に伴う体力の低下など、日々の問題として出てきている。最大の問題は若い人の働き場所。短期の仕事は充分にある。現役の若い世代が結婚し、子育て、子供の教育を考える事の出来る安定した職場が必要であるが、それが無い。南相馬市が復興するには、市の周辺で若い人の働く場所が必要である。放射能の影響のない場所の高齢化の速度にくらべ、若い人がいないため何倍もの速度で急速に高齢化が進むと思われる。若い人はいたくてもおれない環境。働く場所をどのように確保するか、作っていくか、起業していくか、そのような事についての素地、制度を考えてほしい。

今野さんの居住されていた小高区は、放射能のため避難し、400日経って宿泊以外の立ち入り制限がやっと解除されてから、ガレキの撤去などに手が付けられるようになった。



(和田) (中嶋) (今野さん)



今野さんの自宅付近



2年半経っても放置されたままの車



海岸から流されてきたテトラ



3.11 と全く変わらない小高駅前駐輪場



仮設住宅内集会所

(2回目の東北訪問を終えての感想)

- 東北から発信し続ける事が大変重要と思う。阪神大震災時は2カ月後に地下鉄サリン事件があり、マスコミのテーマがトップではなくなった。1年経ち、2年経ちして、世間、国内外とも情報は、被災直後のままであった。復興情報や、今の課題などが殆ど報道されなかった。これでは駄目で、世間、政府の注目を集め続ける必要があるので、情報は発信続ける事が大事である。(中嶋)
- 東北と神戸は震災同窓生と考えており、東北のためには神戸、長田の復興がきちっとやり続けられて、初めて安心してもらえると思っている。我々は年をとっているが、もう少し頑張っているものになっていくことを示すことが、東北への協力と考えている。条南中学生が神戸を見て、これならやれると思ったようです。(和田)

一東北は過疎化が進んでいることを、東北の皆さんが言われていた。漁業は国からの支援で加工場は出来たが、働く人がいない、若い人がいないのが現状である。福島県で言われているのは、放射能による「分断」という言葉である。年寄は地元に残るが、若い人は地元から出て行っている家庭内の分断、賠償額の違いによるコミュニティの心の分断もおきている。自然災害では起り得ない放射能の問題が生じている。(佃)

.....
(東北訪問の写真：石巻市 大川小学校)

「大川小の悲劇と釜石小の奇跡」と、対照的に言われている大川小学校を訪問し、校庭の背後にある山に、何故逃げることが出来なかったのかを、あらためて考えさせられた。



番組に対するご意見、ご感想はこちらまで：yuukarinikanpai@gmail.com